

## 大串弘美作 「小さな奇跡」

<前編>

- 矢吹健二 やーいやーい、貧乏人！
- 少年 あいつの近くに寄ると貧乏が移るぞー！
- 加藤<sup>ただし</sup>正 うるさい！
- 健二 うわー！ 貧乏人がしゃべったぞ！ 逃げろー！
- 正 貧乏のどこがいけないんだよ。何も悪いことなんかしてないのに。クソ！
- 正ナレーション 僕の名前は加藤正。青春中学校の 2 年生。僕が小さかったころに父が病気で死んでしまったから、うちは母と 2 人で暮らしている。よく分からないけど、普通の家より貧乏みたいで、体の弱い母に無理をさせないようにと、僕も新聞配達をしている。そのせいで、クラスの矢吹健二やその仲間によくいじめられ、悔しい思いをするけど、相手にしないことにしている。友達の言うことなんかよりも、僕には母のほうはずっと大切なんだ。
- 正 ただいま。あれ？ お母さん、今日は早いね。もう仕事終わったの？
- 母 うん。今日はちょっと具合が悪くてね。早く帰らせてもらったの。
- 正 大丈夫？ お母さん。無理しないで寝ててよ。僕、夕刊の配達終わって帰ってきたら、ご飯作ってあげるからさ。ちゃんと寝てるんだよ。
- 母 ありがとう。気をつけてね。
- 正モノローグ お母さん、いつもすぐに具合が悪くなるんだ。僕がもっと大きかったら、お母さんに楽をさせてあげられるのに。
- ナレーション そう思いながら、僕は夕刊の配達に出かけ、帰りに近所のスーパーに寄った。州に 1 度は僕が買い物をした。考えてみると、学校が終わっても友達とあまり遊ばないし、借りっこするゲーム・ソフトもファミコンも持ってなかったの、余計いじめられたのかもしれない。次の日の朝—
- 母 お帰り、正。朝刊配達、ご苦労様。
- 正 ただいま。お母さん、もう起きてて大丈夫なの？ 今日は仕事休んだらいいのに。
- 母 そうも言ってもらえないのよ。正ばかり働かせちゃかわいそうなものね。お母さんも頑張るからね。
- 正 無理しないでね、お母さん。僕、お母さんまでいなくなっちゃったら、生きていけないよ。おっと、学校、遅刻しちゃう。じゃ行ってきます。
- 母 行ってらっしゃい。
- ナレーション こうして僕が学校の近くまで来た時だった。
- 正 あれ？ 何か配ってるぞ。

教会員(女) あ、おはよう。焼きそばパーティーがあるの。よかったら来てね。  
ナレーション そう言って、若い女の人が配っていた小さな紙を受け取った。  
正 (読む)「みんなで来てね、焼きそばパーティー。9月23日、土曜日。川間キリスト教会」ふーん。教会のパーティーか。ただで食べれるみたいだし、行ってみようかな。  
ナレーション 僕はその週の土曜日、“タダの焼きそば”に引かれて教会に行ってみた。  
正 こんにちは。あの、このチラシ見て…。  
教会員(男)A やあ、よく来たね。さあ、こっちだよ。  
正 わあ、こんなにたくさん！  
ナレーション 案内されたホールみたいなどころには、何人かの中学生がもう来ていて、そのテーブルの上には、山盛りの焼きそばの大きな皿が2つ置いてあった。  
教会員(女) どんどん食べてね。残したら罰金だぞー。  
教会員(男)B じゃあ、みんな食べる前に、1曲賛美しよう。賛美っていうのはね、目に見えないけど、僕たちをいつも守っていて、このおいしいものも下さった神様を褒めたたえて歌うことなんだ。この曲、知ってるかな？  
(音楽) 「喜び、広げよう」  
教会員(女) はーい。じゃあ、お祈りします。みんなは目を閉じてくださいね。愛する天のお父様…(FO)  
モノローグ お祈りなんてするのか。食べるまで時間がかかるんだ。タダだから我慢するか。「天のお父様」ってだれだろう？  
教会員(男)A さあ食べようね。みんなお皿持ってきて。よそってあげるよ。  
(効果音) (食べながらの語らいのガヤ)  
教会員(女) さあ、それでは、みんなおなかもいっぱいになったと思うので、ここら辺で、ちょっと牧師先生のお話を聞きましょう。  
牧師 皆さん、こんにちは。今日はよく来てくれましたね。みんなたくさん食べたかな？今日はね、みんなにとっても大切な、知っているとすごく得する話をしようと思っています。さっき、食べる前にお祈りした時に、「天のお父様」って言いましたね。実は、天には、わたしたちをつくらせてくださった本当のお父様である神様がいらっしゃるのです。神様は、いつもわたしたちのことを見ている、困ったことや悩みを聞いてくれます。だからといって、テストの答えを教えてくださいというのはダメだよ。  
全員 (笑い)  
牧師 聖書にはこう書いてあります。「空の鳥を見なさい。種まきもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは鳥よりももっと優れたものではありませんか。」みんな、空を飛んでいる鳥は、食事を作ることも、会社に行ってお金を稼ぐこと

もしないのに、ちゃんと生きてるよね。みんなはスズメやカラスよりも、もっともっと優れた生き物でしょ？ 小さな鳥によくしてくださる神様が、みんなによくして下さらない訳はないって思わない？ 神様なみんなにとって、今何が必要なのか、みんながどんなことを喜ぶのか、すべてご存じです。みんな、この絵を見てごらん。羊を抱いて、ほかにもいっぱい羊がついてきてる、この人。この方はイエス様といってね、神様のただ一人のお子様なんだけど、わたしたちの心の中にある悪い思いを全部身代わりに負って死んでくださるために、人の姿になって来てくださったんだ。わたしたちのために、ただ一人のみ子を死なせるほど、神様は一人一人を愛しておられるんだ。だから、この神様にどんなときにも守られていることを信じて、何も心配しない、つぶやいたりしない、いつも「神様、ありがとう」って気持ちでいるとね、ケンカやいじめもしない、とっても優しい気持ちになれるんです。これが、「知っていると、すっごく得をする大切な話」です。みんな、忘れないでね。

ナレーション 教会からの帰り道。僕はさっきの牧師さんの話を思い出していた。「初めて聞いた話だったけど、ほんとにそんな神様がいるなら、どんなにいいだろう。それに、神様が人間になって来てくれたなんて、そんなすごいことってあるのかな。あの優しくそうなイエス様の目…。健二たちも、今の話を聞いたら、僕をいじめたりしなくなるのにな。」そんなことを考えながら、いつも通る土手のふもとにきた時だった。

(効果音) (クーン、クーンと子犬の鳴き声)

正 あれ？ こんなところに子犬が。

(効果音) (子犬の鳴き声)

正 そうか。捨てられたのか。よしよし、かわいそうになあ。でも内は貧乏でお前を飼ってやれないんだ。ごめんな。そうだ、さっき牧師さんが言ってたぞ。スズメやカラスだって神様が養ってくれるんだって。きっとお前のことも、神様が養ってくれるよ。頑張れよ。また明日様子見に来るからな。バイバイ。

正モノローグ そうなんだ。鳥だって神様が食べさせてくれるんだから、僕の家も貧乏だけど、神様がきっと守ってくれる。お祈りって初めてだけど、あの教会のお姉さんのように、神様をお願いしてみよう。「神様、お母さんを丈夫にしてください。僕、今よりも、もっともっという子になるから。どうか、お母さんを元気にしてください。それから、あの子犬も守ってください。」

ナレーション 翌日、僕は学校の終わりを待ちきれないように、土手の下の子犬のところに急いだ。

正 おいで、おいで。(口笛で呼ぶ)

ナレーション その時だった。クラスのいじめっ子の健二たちが子犬に近寄ってきた。

健二 やーい、チビ犬。

少年 やせっぽっち。どっか行っちゃえ！（石を投げる）えい！ えい！  
(効果音) (犬がキャンキャンほえる)  
正 あ、あいつら子犬をいじめてる。やめろー！ やめろー！ 先生に言いつけるぞ。  
健二 ヤベー。逃げようぜ。  
ナレーション その時だった。  
少年/正 (同時に)あ！  
(効果音) (車の急ブレーキの音。「ドン」と健二が車に跳ねられる音。)  
少年 健ちゃん、健ちゃん！  
ナレーション 健二が、急停車した車のバンパーに突き上げられて、地面にドンと落ちると動かなくなった。  
少年 正、健ちゃん死んじやったぞ。お前の、お前のせいだからな！  
正 死んじやった…。ど、どうしよう。  
ナレーション 僕の頭の中は真っ白になった。  
(音楽) (不安そうに)

#### <後編>

正 やめろー！ 子犬をいじめるなー！  
健二 やばい、逃げろ！  
少年 あ！  
(効果音) (車の急ブレーキの音。「ドン」と健二が車に跳ねられる音。)  
少年 健ちゃん、健ちゃん！ 正、健ちゃん死んじやったぞ。お前の、お前のせいだからな！  
正 ど、どうしよう。  
ナレーション 僕の名前は加藤正。青春中学校の2年生だ。僕をいつも「貧乏人」と言っていじめているクラスの男の子が、子犬をいじめているのを注意したら、その中の矢吹健二が、逃げるときに道路に飛び出して車に跳ねられちゃったんだ。どうしたらいいんだろう？ 父が死んでから、家は貧乏で、体の弱い母一人では病院代も払えるはずがない。悩んでいると、ふとこの間の牧師さんの言葉を思い出した。  
牧師 (エコー)いつも神様はわたしたちを見ていて、困ったことや悩みを聞いてくださいます。  
正 そうだ、牧師さんに相談してみよう。  
ナレーション 僕は、あの焼きそばパーティーで初めて行った教会に急いだ。  
牧師 …そうだったのか。それは大変だったね。分かった。わたしで力になれるなら、できるだけのことをしよう。神様にお祈りをして、お母さんと一緒に、相手の人と

よく話し合うんだ。君がケガをさせたわけじゃないし、車の運転手もきっとそのことは証言してくれるよ。神様は、信じて頼る者には最善のことをして下さる。さあ、まず健二君が直るようにお祈りしよう。

ナレーション そう言って、牧師さんは心を込めてお祈りしてくれた。温かいぬくもりを感じながら、祈ってもらおうと、何だか心の中が軽くなったような気がした。僕は母と、健二が入院している病院にお見舞いに行った。

健二 どうしてくれるんですか！ うちの子は何もしていないのに。何の恨みがあるんですか？ まだ意識がないんですよ。もしこのまま意識が戻らなかつたら、植物人間にでもなつたら、どう責任を取ってくれるんですか！ うちの子を元通りにして…(泣き崩れる)

正 (走り去りながら)ク、クソー！

母 正、正！

ナレーション 僕は夢中で病院を飛び出すと、当てもなく走り出した。気がついたら、あの土手の下の子犬のところに来ていた。

(効果音) (子犬の「クーン、クーン」と鳴く声)

正モノローグ クソー！ 何でこんなことになっちゃったんだよ。神様はいつも守ってくれるんじゃないのかよ。せっかく、いい子になってお母さんを元気にしてもらおうと思ってたのに。これじゃ、お母さんまた病気になっちゃうよ。僕が何悪いことしたんだよ。(歯を食いしばって泣く。)

ナレーション 涙があとからあとから出て止まらなかった。その時だった。

牧師 (遠くから)おーい！ 正くーん！ (近づいて)ここにいたのか。お母さんが心配していらっしゃるぞ。

正 先生。何でこんなになっちゃうんですか？ 僕は何も悪いことしてないのに。何で神様は僕をこんな目に遭わせるんですか？ 神様は守ってくれるって、最善のことをしてくれるって言ったでしょう、先生！(再び泣く)

牧師 うんうん分かるよ、正君。先生にもね、神様がどうしてこんなことをされるのか、たまに分からなくなることがある。「何でこんなにひどいことを」ってね。正君は、傷ついた真珠貝の話を知ってるかな？

正 傷ついた真珠貝…？

牧師 うん。海の底にいる貝は、たまに、ゴミや砂を吐き出すために口を開けるんだ。そのときに、貝の中が傷ついてしまうんだな。貝でもね、傷つくと痛いらしく、その傷を直すために体の中からいろいろな分泌液を出して、その傷に塗るんだそう。その分泌液が何年もかけて固まったものが、あのきれいな真珠なんだ。つまり、痛みと苦しみの塊が、あの美しい真珠になるんだよ。人間も、つらいことや悲しいことを通して、だんだん大きく美しく立派に成長していくものなんだ。きっと今回のことは、正君が大きく成長するための、神様が与えられた試練な

んだよ。

正 試練…？

牧師 そう。神様が正君を試しているんだよ。でも神様は、正君が耐えられないような試練をお与えになる方ではない。試練とともに、脱出の道も備えてくださっているんだよ。きっと神様は、このことを通して正君に教えたことがあるはずだ。それは何だか分からないけど、正君、自分で神様に祈ってごらん。そうしたらきっと神様はこたえてくださるよ。

ナレーション 僕は、牧師先生が行ってしまうと、先生に言われたとお祈りしてみた。

正 神様、どうしてこんなことになってしまったんですか？ 先生は、神様が僕に何か教えたことがあるって言ってたけど、僕にはよく分かりません。神様、本当にいるなら、どうか健二の意識を戻してください。もうお母さんをこれ以上悲しませたくありません！

ナレーション 僕は祈っているうちに、疲れもあって何だか眠くなって、草むらに横たわって眠ってしまった。僕は、いつの間にか夢を見ていた。この間の焼きそばパーティーの時、教会にはってあったイエス様とそっくりの人が、夢の中で歩けない人の足を治していた。

(音楽) (ファンタジックな感じのブリッジ)(以下夢の間、セリフはエコー効果)

男 どうか、わたしの足を治してください。

イエス さあ、歩きなさい。

ナレーション 足の悪かった人が、起き上がって歩き始めた。

正モノローグ すごい！

正 イエス様、どうか健二の意識を戻してください！ 健二を元通りに治してください！

イエス あなたは、わたしを信じますか？

正 信じます。今回のことが、僕の中から見ればとんでもないことでも、あなたは最善をしてくださると牧師さんが言いました。あなたは健二を治してくれるって、信じてます。

イエス あなたの信仰が、彼を治したのです。

(音楽) (ブリッジ。現実に戻る)

正モノローグ (ハッと夢から覚める)何だ、夢か…。でも何かとつても… 本当のような気もする。もしかして…。

ナレーション 僕は健二の病院に駆け込んだ。

正 け、健二。

ナレーション 健二が、健二がベッドの上に起き上がっていた！

健二 正、ごめんな。僕が悪かったんだ。

正 健二…。よかった…。

正モノローグ 神様、ありがとう。ありがとう…。

ナレーション 僕は思わず心の中で叫んでいた。

正モノローグ 神様って、本当にいるんだ、生きているんだ！

ナレーション それが僕の実感だった。

正モノローグ 牧師先生、ありがとう！ 先生の言ったこと、本当だった！ イエス様の神様が守ってくれたんだ。信じてお願いすれば、すごいことしてくれるんだ！

ナレーション 僕は、牧師先生の待ってる教会に向かって走り出した。

(音楽)

ナレーション (ブリッジ。明るくさわやかに)

ナレーション それは3か月前の出来事だ。僕はその時から、毎週日曜日の教会に通っている。母も一緒だ。君はどう思う？ 健二は運がよかっただけだって？ あるいは医者の手当てが効いたんだって？ そう思うなら思ってもいいさ。でも僕は信じてる。健二は、イエス様が治してくれたんだ。あの夢の中の足の悪い人のように、イエス様が手を取って起こしてくれたんだって。

(完)